

サンゴ礁生態系保全行動計画の評価指標の整理の方向性について

「サンゴ礁生態系保全行動計画 2022-2030（以下、行動計画）」では、行動計画の達成状況を評価するための指標を遅くとも令和6年度までに設定することとしている。

また、行動計画は、2022年12月の生物多様性条約COP15で採択された「昆明・モントリオール生物多様性枠組」を踏まえて現在改訂中である「次期生物多様性国家戦略」におけるサンゴ礁保全に関する具体的な行動計画であることから、その評価指標を作成する必要性・重要性が高まっている。

このような状況を踏まえ、令和4年度より行動計画の達成状況を評価する指標についての情報収集を始めたところである。

1. 「サンゴ礁生態系保全行動計画 2022-2030」の目標の記述

「サンゴ礁生態系保全行動計画 2022-2030」では、目標及び重点課が以下のとおり明記されている。これらの目標や重点課題を踏まえて、評価指標の整理の方向性を検討する。

【最終目標】

将来にわたり、サンゴ礁生態系が健全な状態で維持され、その恵みを享受できる自然と共生する社会を実現する

【2030年度末における目標】

サンゴ礁生態系保全に向け、広域かつ中長期的視点の取組と、地域社会と結びついた取組の実践が加速されること

【対象】

サンゴ礁域及び高緯度サンゴ群集域とし、さらに連続する砂浜や磯浜等の沿岸環境や、隣接する藻場や砂泥底、干潟やマングローブ林等との空間的なつながりと、そこに分布する生物群集それぞれとのつながりを勘案する。

【重点課題】

■重点課題 1. サンゴ群集に関する科学的知見の充実と継続的モニタリング・管理の強化

<目指すべき姿>

日本のサンゴ礁生態系の現状と、その劣化をもたらす要因、及び保全活動の状況（オニヒトデ駆除、気候変動への適応策を含む）が俯瞰的・網羅的にモニタリングされるとともに、隣接する生態系とのつながりについての情報が収集され、それらのデータが環境データとともに一元的に管理・分析・発信され、各主体の保全の取組に活用される。これらサンゴ群集と保全活動の情報や国外での情報に基づいて各課題における評価指標を設定する。

■重点課題 2-1. 陸域から過剰に流入する赤土等の土砂及び栄養塩、化学物質等の負荷への対策の推進

<目指すべき姿>

関係機関の連携、協力により、陸域からの土砂・栄養塩・化学物質等の過剰な流入による負荷の軽減対策が推進されるとともに、その効果の検証が実施され、そこから得られる教訓

が他地域でも応用可能になるように整理され、提供される。

■重点課題 2-2. サンゴ礁生態系における持続可能なツーリズムの推進

<目指すべき姿>

サンゴ礁生態系において、過剰な利用や不適切な利用の抑制が行われるとともに、自然や地域の文化に関する認識を高めるような、持続可能なツーリズムのモデル事例が構築され、そのノウハウ等が広く共有される。また、海外からの観光客数の増加を見越した、保全への理解を深める効果的な多言語対応の普及啓発ツールが開発され、提供される。

■重点課題 2-3. 地域の暮らしとサンゴ礁生態系のつながりの構築

<目指すべき姿>

多様なステークホルダーが協働することにより、サンゴ礁生態系の保全活動が推進されるとともに、サンゴ礁生態系がもたらす恵みが地域毎に整理され、理解され、適切に活用されることを通じて、地域主体のサンゴ礁生態系の保全と持続的な利用が促進される。

2. 評価指標の整理の方向性

評価指標の枠組みの案の作成にあたっては、「次期生物多様性国家戦略」の目標・指標の議論を考慮し、アウトカム指標、アウトプット指標を設定することとした。行動計画の「最終目標」、「2030年末に向けた行動目標」をそれぞれ、「状況目標（アウトカム）」、「行動目標（アウトプット）」として捉え、さらにそれに向けた各主体の「取組み（インプット/アクティビティ）」を関連付けて整理することで、下記の枠組みにより評価指標を整理することとしたい（図4-1）。具体的に指標の案を含めた評価指標の枠組みの案と指標の例を資料4-2に示す。

なお今後、「昆明・モンリオール生物多様性枠組」及び「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」にて掲げられている海やサンゴ礁に関連する目標と齟齬のない形で、サンゴ礁生態系保全行動計画 2022-2030 の評価指標設定および目標の具体的検討を行う。

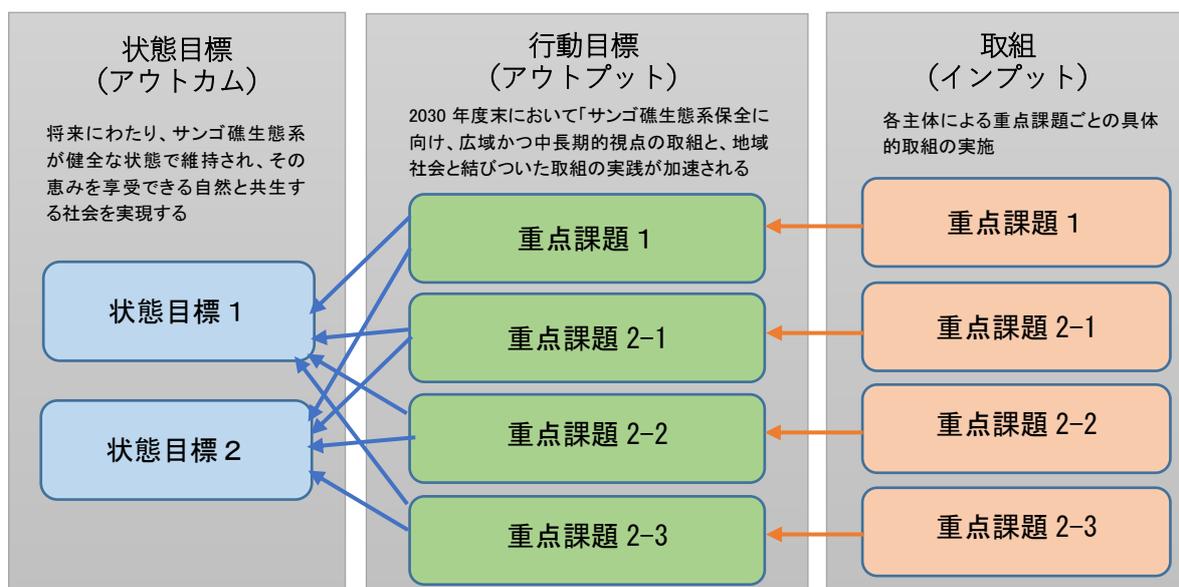


図 4-1 サンゴ礁生態系行動計画 2022-2030 の評価指標の枠組 (案)